

連携と参画による「防災まちづくり」と本会運営を目指して

塾長（代表理事） 鷲山龍太郎

2023年には関東大震災100年を迎えることになり、東日本大震災10年、阪神淡路大震災四半世紀を経て、また、新型コロナウイルス・パンデミックという世界的な大災害、さらに地球温暖化と人類の存亡に関わる巨大災害に加速がかかる試練の只中に私達は生きています。

これまでの災害の教訓を生かした災害対策を、そして、新たな災害課題への対応が個人の意識としても社会としてもどこまで実現できているのでしょうか。

進展した部分があれば、課題として残り続けているものもあります。

本会、防災塾・だるまは、初代塾長荏本孝久先生が「防災情報の共有化と人的ネットワークの構築」を目的として、市民の皆さんと共に2006年に創設した任意団体です。荏本先生には、名誉塾長として、理念的にも学問的にも引き続きご指導を頂きたいと強く願っております。

その理念と資産を第二代の塾長として継承させていただくことは身に余る光栄なことであり、崇高な目標に向かって使命感を新たにします。

その崇高な目標とは、本会がキーワードとしてきた「防災まちづくり」の推進であると思います。これまでの被災地の現実を見ると、地域社会における、自助、共助、公助の連携が希薄であったことが被害の拡大を防げなかった原因となったことを教訓とせざるを得ません。

私は学校長として、地域、保護者、職員、児童の皆様と共に取り組んできた貴重な経験から、「防災まちづくり」を実現するための大切な視点は、「連携」と「参画」であると確信しております。

「連携」とは、「理念の共有」「目的達成のための役割分担」「アクションプラン（何をゴールに、誰が、何時までに、何をするか）」を透明化して共有、運用することです。

「参画」とは、立場の異なる一人ひとりが、主体として考え、意見を交わし、合意に達し、主体として実行し、達成し、または反省を繰り返しながら皆で成長していくプロセスです。

自助、共助、公助それぞれの立場と視点から、「連携」と「参画」が構築できたときに、災害を克服できる、持続可能な「防災まちづくり」が実現していきます。

それは、防災塾・だるまのこれからの会運営についても同様です。

すでに、本会は2021年総会をもって、2021年度年間活動方針・活動計画が理念として確認され、計画に基づいた取り組みがスタートしています。

また、2018年度に行った組織検討のためのアンケート調査から、「集い、語り合えるサロンの場」を求める意見もあったことから、「A自助力向上サロン」「B共助力向上サロン」「C公助連携サロン」「D時事防災課題サロン」の4サロンがスタートし、会員の皆様が、それぞれのサロンの「アクションプラン」に向かって参画していく会運営が始動しました。

「談義の会」も講義を拝聴するだけでなく、事前に講師への質問を考えたり、講義を受けてサロンで議論を深めたりする「アクティブ・ラーニング」の取り組みも昨年から始まっています。

まずは、本会活動への参画と連携により、私をはじめ、会員一人ひとりが地域社会で参画と連携構築ができる能力を高めることが基盤となります。

そして、会としても、理念とアクションプランをもって、災害を克服できる社会への取り組みに参画したいと思います。

「自助・共助・公助が統合」され、地域社会の連携が日本の隅々まで一般化する「防災まちづくり」を会員皆様、また、広く防災に取り組まれている皆様との連携で目指す所存です。

どうぞ、よろしくお願いいたします。

2021年6月



